

[ 脇・心霊講座から ]

「憑依霊」と「地縛霊」(1)

霊魂の存在と働き

人間が<生きている>ということ、それは霊魂の働きで生きているということである。この事実は、(心霊)科学的には間違いのないことが証明されている。しかし、ただ五官の立場にとらわれている今日の学問(唯物科学)では、六官以上の世界を理解できないため、今日の多くの唯物学者からすれば、合理的に理解できないということであろう。

もともと、わが国は、肇国以来、霊魂に関して、近代心霊科学によって導かれた結論を既に認めていた。そしてあくまでも霊魂不滅を確認し確信している国柄であった。ただ、われわれの先祖は科学的にこれを体系づけようとはしてこなかった。しかし、古来からの文献によって明らかなように、日本精神として、日本の伝統はこの上に立った人生観・世界観に基づいているのである。

これに関連して、浅野和三郎先生は「日本国民の精神的原理」という著書において、つぎのようなことを述べられている。

「日本国民が霊魂の存続につきてかれこれ文句を言い出したのはホンの近頃のこと、徳川時代までは、それがほとんど全国民の常識だったのである。それは日本が生める謡曲、戯曲、碑史、物語の類をひもといってみても又民間信仰を直視してみても、判りきった話である。ただ困ったことに日本国民は純学術的にこれを実証する方法を知らなかった。巫婆の如きものがあるにはあっても、幽明交通機関としてはなはだ不完全なものであったので、心ならずもとぼけて暮らして来たのが最近の六、七十年なのであります。もしも日本国民が真に衷心から霊魂の存続を否定していたら、神社仏閣を片っ端から破壊するとか、法事や祈祷の類を全廃するとか、もう少し徹底的の態度にでたはずだ。それもできず、去りとて堂々と自己の所信を告白することもならず、煮え切らない顔をして首鼠両端(注：形勢をうかがって心を決めかねていること)を持せねばならなかったのは何とつまらないことであつたらう。

この際心霊科学の勃興は日本国民にとりて正に旱天(注：日照り)の慈雨である。国民は大手をふって祖先伝来の正しい信仰に戻ってよい。ぐずぐず異議を申し立てるものがあつたら心霊科学がその周到な理論と厳正な実験とを提げて微塵に反対論者を砕いてくれる。」

と述べられていることで判然とされるであろう。

死後、霊魂で生きていることを信じ、お祭り（祀り）、供養、年回といった行事を採用してきた。かくして、先祖の祭りとなり、祖先崇拜の思想となって日本精神のなかで生き抜き伝統となった。それだけではなく、死後も生き通しているというところから、拝むという行為が祈る行為になり、その祈りについても命がけの祈りすら世に見受けるのである。

しかし、今日の人々の多くはこれらの行事という「体裁」とらわれ、社会行事とし、もはや仏教といわず既成宗教の世界では、宗教のいかようであるかを逸脱してしまい、その信仰や祭祀には迷信といってよい行事を行い、その多くの宗教人は、彼らの生活の具にこれを供して、恬淡としている。あるいはその実、その誤りに気づかないでいるということかもしれないが。

これをもう少し具体的に指摘すれば、仏教はあくまでも無霊魂主義であり、魂の存在、霊によって生き通している不滅視は認めていないはずである。認めているものは無であり、空であり、あるいは業（カルマ）といったものに過ぎない。そして社会現象としてあくまでも主観的観念的である、

今日においては心霊科学によって死後個性の存続は疑いのない学術的事実であることが明らかにされた。したがって、仏教が死後を認めようとするならば、いさぎよくこの学問に基づいて正しい信仰の進め方、行き方を信者に教え導くべきであろう。

死後、仏となっているから「拝めばよい」という単純な考え方あるいは指導から、ついには誤った拝み方によって信者やその一家をして不幸・不運へと陥る方向に誘導していることに全く気づいていない。その中でそうした誤った祈りから導かれる不幸や不運を、単に「因縁」という言葉で片付けてしまっている教団があるとすれば大いに問題であるが、おそらくこれが信者共通の常識となってしまうのではなかろうか。不幸と拝み方とのつながり、そしてそこに存在する矛盾を理解していないようでは、無防備も甚だしいということになる。

今回は、そうした拝み方が不幸や不運にどのような理由で方向づけられ関わっているのかについて述べたい。これらはいくまでもなく霊魂の働きであり、それによって幸や不幸がもたらされる。とくに不幸、不運をもたらす霊の働きが主として「憑依霊と地縛霊」によるということであり、ある時は「憑依」によって、ある場合は「地縛」されたことによって導かれていたということである。

なぜ人間に靈魂が憑くのか

靈魂は人間ばかりではなく、宇宙間、万有のすべてに憑依する。これを理解するためには、その前提となるつぎの事柄をぜひ知っておいてもらいたい。

地球ばかりではなく、天体を含め、大宇宙の周辺を心靈的直感力といえる靈視能力（心眼）をもって観察すると、それはすべて靈界（靈魂の世界）であるということ、その靈界の一部ということになる。あるいは靈界の外、表面といえるところもある。これは＜真実＞である。この事実は決して単なる主観による想像とか空想による＜事実＞を意味していない。「正しい事実」である。文字通りの客觀的事実である。

しかし、この事実はとても一般人の常識では理解することができない。とはいえ、これについては絶対に明らかにさせておきたい。すなわち、これが靈魂の働きについてのすべての前提になるからである。そのためには、この解明に当たって、ぜひ學術による保証以外にはない。この点、海外ではあるが、この学問の研究グループもあり、成書もあるため、これに基づいて理解を深めていただきたい。

以上の結論は要するに、われわれ人間は人間界（物質界）の法則（自然科学）で地上的物質的生存をつづけていると同時に、靈界の法則の下で生きている、いわば両生動物であるといえるわけである。すなわち一方で靈界の雰囲気の中、エーテル生活を送っているのである。これが正しい考え方である。ある人は、これをみて「幽明交通下」と言っている。またある人は「幽現一致」とも言っている。その他にも現界と靈界は一つであるという主旨の表現をさまざまに工夫しているわけである。こう説明すれば、あまり難しい用語を使用しなくても、関心をお持ちの方々にはすでに理解されていることと思う。

要点として、大宇宙のなかでの靈界である地球と言えるのであるが、このように言うとも誤解されるかも知れないので、大宇宙も靈界であるというより、大宇宙というのは五官的表面を指しているので、正しい表現によれば、大宇宙の内面に宇宙神靈界がある。これを大宇宙の深奥ということで理解されればと思う。

これらを別な面から観察すると、物質とは単に五官で見ただけの外形的存在のみではない。物質には一つの例外もなく、深奥の世界である内面（次元）が存在しているわけである。単なる肉眼で見える形体だけではない。この見方を心靈科学では、「その世界に幽体がある」といい、物質の内面に幽体という五官で見ることのできない物質との融合によって構成されている。すなわち「幽体を加重している」というのである。

また、人間にも同様、肉体という物質の内面に幽体が加重、融合しているのである。もっと正確に言えば、その肉体と幽体を有機的に、生存的に、活動的にすべてを生き

た状態にさせて生命を与えるという、現実の状態にするために複体というものが存在する。もちろん、肉体は物質という肉体の眼である五官の眼では見ることはできるが、幽体といわず、複体はこの五官の眼では見ることはできない。いわば心眼によってのみ見ることができる物体である。それはやはり超物質の一種であることはいうまでもない。

この大宇宙の間に、霊界（超物質界、エーテル界）とか、物質界のなかに、どんな生きものが存在しているのであろうか。一般の人々は「生物」といわれているものだけが生きている、働いていると考えることと思うが、それ自体は正しいものの、より正確に言えば、この大宇宙には自然霊と生物霊とが働いている。さらにその生物霊を分類すると、人間霊（人霊）と動物霊とに区別されるのである。

驚くことには、これらの霊魂が、実はその生物を生きものたらしめているのである。一例で言えば、人間という生きものは、生きるために霊魂が憑いて生きているのである。いや、人間とは肉体と霊魂とで生きているのである。肉体は死物であるが、その死物に霊魂が働きかけて生かしている。生命を与えているというわけである。別の言い方をすれば、この肉体から霊魂が去ってしまえば、それが、一般にいう「死」である。けれども、生きものである霊魂は亡びない。死なない不滅性をもったものである。そこで肉体は死物となっても霊魂不滅ということから、人間の個性は亡びない。生き通している。それが宇宙のどこかに居住している。この世界こそが霊界なのである。

生きものであるすべての動物はみなこの組織、構造は同じことであるので、人間とかわることはない。かわりがあるとすれば人間の霊魂は高等（高級）であるということ。具体的に言えば、この人間霊には英知が具えられている。一般動物はそれが高等でも下等でも英知はない。あるのは感情だけである。特記すべきは、この生きもののうち自然霊といわれている霊の存在であり、一度も地上に生まれたことがない。しかし、人間に働らきかけているし、人間を動かしていることも事実ではある。この自然霊というのは、宇宙霊ともいえる。それは宇宙と共に生きているからである。大宇宙と共に生きている。これで理解されない方は、まず、一般の言葉でいう宇宙霊、すなわち自然霊の高級な存在が造物主であり、宗教的に言えば「神」であるといえよであろう。ここで、一般にいう「神」であり、そうではない単に「霊」といい、神とは言えない低級なものも、この自然霊のうちに存在しているので、それぞれを区別する必要はある。

こうした霊魂が憑き、働くために、また生きる道を講じるために、人間といわず、生きものにはすべて肉体外に「幽体」という媒体が具わっている。いわば、霊魂の宿

である。

もちろん、幽体は霊界に属するものである。前述のように、すべての人間にも、物質にも、その内面に「幽体」があるため、すべての物体に霊が憑くことは自由であり、不思議でも何でもなく、当たり前のことでもある。霊の意図によって憑くのもある。

要するに、以上で明らかになったと思うが、霊界に生きている以上は、人間に靈魂が憑くことは別に不思議なことではないことになる。

これらのことについて、一つの例として「霊界通信」という現象がある。しかし、この中には信憑性のない幽界の低級霊（霊の世界でも下級の世界に属する未発達な靈魂）からの通信があるため、その情報には細心の注意を要する。このように、幽明一致、幽・霊界と地上とは、同じ宇宙間であり、いつも何らかの方法で交通しているのである。

霊界といっても画一的な世界ではない。そこには低級な世界から高級な世界まで、いわゆるいくつもの「階層」が存在する。以下にもっとも信頼性の高いといわれているマイヤースからの霊界通信を紹介したい。

まず、靈魂の定義から霊界における向上の過程を聞こう……

「自分（マイヤース）は魂に定義を下して、生命のそれぞれの段階における『現在意識』であり、『存在の総量』であるといっている。唯物論者以外のものは、人間を『体、魂、霊』の三つから成るものと信じているが、これは決して間違いではない。が、多くの人たちは魂が進行の段階のあることを知らない。第五界に達すると、いよいよ類魂の中にまじり、一方では自らの個性を保存しながら、他方には個人的存在の彼方の<界>に進む。」

またマイヤースは、地上生活はまず肉体によって進歩的靈魂に向上するための準備の場所であるとして、つぎのように述べている。

「いかなる肉体も、肉体以外のあるもの……魂によって動かされる。肉体には自動的の性能がない。魂が働けばこそ肉体は内部から動かされ、魂が存在すればこそ肉体には生命がある。」

これは正しい人間の指導原理である。「心」なしには肉体は動かない。心は肉体以

上のものであるという。これらマイヤースの通信には、彼の生前の研究体系と一致しているのである。それによっても明確に現界と霊界が常に交通していることが歴然としており、間違いないのである。